

Title	スペインにおける地域ナショナリズムと諸社会層：カタルニスモと地主・農民(続・完)
Sub Title	Nationalism and social classes in Spain : the Catalan experience, perspectives from landed proprietors and peasants (2)
Author	八嶋, 由香利(Yashima, Yukari)
Publisher	三田史学会
Publication year	2003
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.72, No.1 (2003. 2) ,p.81- 105
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20030200-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

スペインにおける地域ナショナリズムと諸社会層 ——カタラニスモと地主・農民——（続・完）

八 嶋 由香利

一九世紀末ヨーロッパに広く進行した農業危機は、カタルーニヤにおいてもそれまで伝統的規範・慣習の下で半ば自己抑制されてきた地主・小作農関係を流動化・不安定化させた。小作争議が頻発し、その中で地主、小作農双方とも、自分たちの階層的利害の意識にめざめ活動をおこす。地主の利益を代表する聖イシードロ農業協会が農民に対するプロパガンダを活発化する一方で、小作農たちも自己防衛のための組織作りに着手していくた。

このような農村の伝統的秩序の揺らぎをみた一九世紀最後の数十年間は、同時にカタルーニヤの地域ナショナリズム（カタラニスモ）が盛り上がり、その活動が文化的領域から政治的領域へと広がりを見せる時期でもあった。カタラニスモは、カステイーリヤ地方を中心とするスペ

イン国家の自由主義的・中央集権的政策に異を唱え、カタルーニヤ固有の利害の擁護を第一に掲げるナショナルな復権運動である。これは農業危機を克服し、農村におけるヘゲモニーの維持をめざす地主層の心を捉えることになる。一九世紀末以後の農村の構造的変化、そしてその中で地主や農民たちがカタルーニヤのナショナルな政治勢力とどのように結びついたのか。この問題を考察するため、本稿の後半部分では特に地主層に焦点を絞り、この時期彼らの動向を規定した社会・経済的諸要因を検討し、その政治行動とカタラニスモの運動がどのように結びついていったのかを考えたい。⁽¹⁾

三、変容する農村社会

(二) 農業危機と農村の過疎化

農業の「黄金期」に沸くカタルーニャ農村を一変させたのは、フィロキセラ（ブドウ根アブラムシ）であった。一八七九年、フランスからピレネーを超えるカタルーニャ北部に侵入してきたフィロキセラは、一九〇〇年ごろまでカタルーニャの全ブドウ畠を荒らし続け、栽培農家に壊滅的な被害をもたらした。既に数年前から懸念されていたものが現実となつたのである。フランスからの侵入を防ぐために設置された防疫線も薬品による除去も効果はなく、カタルーニャ全体で三八万五千haが破壊され、被害総額はおよそ三億五千万ペセタにのぼつた。ブドウの作付け面積は激減し、特に山間部やブドウ栽培にあまり適さない地域では、農民は荒廃した農地を手放し、都市へ出ていった。その結果、作付け面積は被害前のおよそ五六%⁽²⁾にまで減少し、その後も決して回復することがなかつた。

ブドウ栽培の中心地では、フィロキセラに強いアメリカ産ブドウ株が輸入され、歐州産のブドウと接木された。しかし、これは農家に多大なコストと労力を課した。彼

らは新しいブドウ株が実をつけるまでの数年、穀物や豆類を栽培して食いつないで行かなければならぬ。また、株を植え替えるとしても、新しいブドウの木は以前より多くの肥料を必要とする。さらに伝統的な技法である取り木 (coglets, capticats) によって育成された新しい苗は、フィロキセラに対する免疫を持たなかつたので、農民はブドウの元木が枯れていくのを手をこまねいて見てはしかなかつた。つまり、フィロキセラ禍は、従来の伝統的な栽培方法や労働形態の終わりを告げるものとなつたのである。

新しいブドウ株の植付け費用を誰がどの程度負担するのか。また古いブドウ木が枯れたことで、新しい小作契約の内容をどのようにするか。こうした問題が新たに発生した。ブドウ株植え替えの費用を単独で負担できる農家は少なく、小作農民（ラバッサイラス）は地主に負担の増大を求めた。これに対する地主の態度は様々である。ある者はそれまで小作農が支払ってきた税金を負担することに同意した。⁽³⁾ 肥料や諸経費の負担増を受け入れる地主もいた。逆に、負担増を嫌つて収穫の取り分の削減に同意する地主もいた。また、小作農がブドウ株植付けの費用を支払う能力が全くない時は、地主が全額を負担し

た。その場合、ラバッサイラスは「下級所有権（用益権）」をもたない單なる分益小作農（アパルセロ）に転落することになる。少数ではあつたが、フィロキセラにより「ブドウ株の三分の一が枯死した」という理由で、ラバッサ・モルタ契約の継続を拒否する地主もいた。こうして地主が強引にラバッサイラスの追い出し（desahucio）をはかる場合には、小作農の側も団結し抵抗した。新聞には連日のように、警察の騎馬隊によつて守られたブドウの収穫、治安警備隊と農民との衝突、森林や収穫物の焼き払い、夜間のブドウ株伐採や引き抜き、地主との合意に至つた農民への威嚇やいやがらせ、地主へのあからさまな敵意や様々なボイコットといった記事が掲載された。⁽⁵⁾こうして九一～九六年の間、中世の「ランサ農民」の蜂起以来と言われるほどの激しい農民闘争が展開されることになつたのである。⁽⁶⁾

フィロキセラ禍は一九世紀後半から減少しつつあつたラバッサ・モルタ契約の形骸化に一層拍車をかけた。契約期限を定めない伝統的なラバッサ・モルタは、フィロキセラ禍以後ほぼ完全に消滅してしまつたのである。ブドウ栽培の中心地アル・パナダースのラバッサ・モルタ契約数（公証書）は、被害後の植え替え期（一八九一～

一九〇〇年）に一〇四であつたが、この数は全小作契約数の一割にも満たず、しかもその内のほとんどが契約期間を限定している。⁽⁷⁾

また、新しく結ばれた契約の多くは公証書によるものではなく、私文書か口頭での約束だつた。さらに、地主は契約書に「ラバッサ・モルタ」という文言を盛り込むことを巧みに回避し、代わりに「アパルセリア」あるいは「現物を分配するアレンダミエント」という表現を使おうとした。これらは一見すると従来のラバッサ・モルタと実質的な相違はないよう見えるが、一旦裁判になると小作農の側が大幅に不利なる。なぜなら、私文書や口約束では正式のラバッサ・モルタ契約とは認められないし、また「アパルセリア」や「アレンダミエント」という言葉が挿入されると、小作農の追い出しが可能になるからである。しかし、契約用語の意味内容に精通している農民は少なく、新しい契約が従来どおりのラバッサ・モルタであると信じ込んでいる者も多かつたのである。こうして伝統的なラバッサ・モルタは消滅していく。

新しいアメリカ産のブドウ株は、古い株に比べ樹の命がそれまでの半分程度しかなく、しかも、フィロキセラ

禍以後は伝統的な「取り木」の技術が使えなくなつたため、ブドウの木は二十数年後に枯れ始めた。こうしていつたんは鎮静したかに見えたラバッサイラス争議は、植替え問題の再発と共に、一九一〇年～二〇年代またカタルーニャ農村を揺るがすことになる。

地主と小作農（ラバッサイラス）の対立に拍車をかけたのが、フランスへのブドウ汁（モスト）の輸出の激減と国際市場におけるワイン供給のだぶつきである。⁽⁹⁾ フィヨリキセラ禍から一足早く回復したフランスの農家は、もはやスペイン産のブドウ原液を必要としなかつた。また、生産過剰によつて一八八〇年代からワインの価格は低下傾向にあつた。しかも実質賃金上昇に伴う生産コストの上昇、カタルーニャ産ワインの競争力の弱さも加わつて、ブドウ栽培農家の収益は低下の一途をたどる。一八六〇～一八八九年のワイン平均価格は一ケースあたり二五・二三ペセタであるのに対して、一八九〇～一九一七年には二〇・四三ペセタにまで低下する。その後、一九一八年には二七・五〇ペセタへ再び上昇しているが、生産コストの上昇により、収益はそれぞれ一一・二三ペセタから三・四三ペセタへ、さらに一九一八～一九

三年には一・五ペセタにまで落ち込んでいる。⁽¹⁰⁾

フィヨリキセラ禍とワイン産業の不振は、山間部から地中海沿岸部への人口移動を一層加速させ、また、アメリカ（キューバ、メキシコなど）への移民も発生させた。内陸部のプリウラットでは一八九〇年と一九〇〇年の間に人口のおよそ二五%に相当する二千人が流出した。また、二〇世紀の最初の三〇年間で、ピレネー山麓のサルダーニャでは人口が九・七%、パリヤルス・スピラードも三・二%の減少を示している。⁽¹¹⁾ その一方で、都市部の人口が全人口に占める割合は高まる。カタルーニャ全人口に占める沿岸部の割合は、一八六〇年の五九%から一九〇〇年には六八%へと上昇した。⁽¹²⁾ 特にバルセローナへの人口集中は激しく、一八五七年～一九〇〇年の間に同市的人口が一九〇%の増加率を示したのに対し、同市を除くカタルーニャの人口は逆に二・三%減少している。⁽¹³⁾ 過疎化のなかで、農村の伝統的景観も変貌していく。何百年も続いた旧家が没落し、ほとんど廃屋と化したマジアもたくさんあつた。⁽¹⁴⁾ こうした村落の荒廃・過疎化、そして都市に対する相対的な地盤沈下は、農村に自らの政治・経済的基盤を置いている地主層の危機を強めたのである。

(二) 共和主義勢力の復活

小作争議が活発になる中、農民たちは自衛のための組織を作り始める。一八九一年、パナダース地域のラバッサイラスは自分たちの利益を擁護するため、スペイン農業労働者連合 (Federación de Obreros Agrícolas de la Región Española) を結成した。その第一回大会ではおよそ三万人の農民が支持を表明し、九六年には同市で第三回大会が開かれ、五三の自治体代表が出席した。連合の中心はバルセローナ県のアル・バンドゥレイにあり、機関紙『農民 El Campesino』が発行された。当時の組織は「ラバッサイラス同盟」と呼ばれ、後に設立された「ラバッサイラス同盟 La Unió de Rabassaires」(一九一〇年創設) の前身と考えられる。連合は主にパナダース、ガラーフ、カンプ・ダ・タラゴーナ、コンカ・ダ・バルバラーナ⁽¹⁶⁾、どちらかといえばバルセローナより南の地域を主な活動拠点にしていた。

この農民組織に対して影響力をもつっていたのは連邦共和主義者たちであった。彼らはガリシアの「フォロス」⁽¹⁷⁾やカタルーニャの「ラバッサ・モルタ」が「永代借地契約」であり、従つて分割払いでの「買戻し」が可能であ

るという立場をとり、小作農の利害に沿った形で紛争の解決を約束していた。連合の機関紙の表紙には共和主義の指導者ピ・イ・マルガイ (Francesc Pi Margall) の姿が掲載され、カタルーニャの主要な連邦共和主義者たちがこれに協力していた。⁽¹⁸⁾ 一八九三年の地方選挙ではラバッサイラスの支援を受けた連邦共和主義者が、パナダース郡など一六の自治体において勝利した。⁽¹⁹⁾ ラバッサイラスたちは農業協会に組織された地主への対抗上、彼らの後ろ盾を求めていたのである。連合と連邦共和主義者たちは、地主と小作農が共存する混成組合の設立に批判的で、傘下の農民に対しても、地主の影響下にある農業組合 (Cambres Agrícoles) には参加しないように呼びかけていた。農村における共和主義勢力の伸長は、地方の行政を掌握してきた地主階層にとって脅威とみなされる。

この時期に共和主義勢力の活動が農村で再び活発になった背景には、一八九〇年からの男子普通選挙の復活がある。⁽²⁰⁾ それまで復古王政下では、中央政府による選挙操作とカシーケ (地方の政治ボス) による選挙民への圧力によつて、共和主義勢力は半ば議会政治のシステムから除外されてきた。⁽²¹⁾ 男子普選の実施によつて、不正選挙や

カシキスモの弊害がすぐに一掃されたわけではなかつたが、少なくともバルセローナをはじめとする都市部では有権者の声が選挙結果に反映されやすくなつてきた。

農村に浸透してきたのは共和主義だけではなかつた。一九世紀後半スペインにもたらされたアナーキズムや社会主義など、労働者にとつての新たな「福音」は都市から農村に伝播し、農民の間にも徐々に広まつて行つた。バジヤース、バージャスなどのバルセローナより北の地域のブドウ栽培農は、連合とは別組織である農業労働者会議（Conferencia de los Trabajadores del Campo）に組織されていたが、その主張はアナー・キズムの集団主義的傾向を帶びていた。⁽²²⁾

フイロキセラ禍と農業危機によつて伝統的農村社会は変化し始める。小作争議を通して顕在化した地主と小作農の利害対立、その対立を利用して影響力を伸ばそうとする新しい政治的イデオロギーや勢力。地主層はそれまでのように既成秩序の上に安穩としている事はできなくなつた。ここに伝統的価値規範にとつて代わり、カルーニャ全農民の結束をはかる」とのできる「新しい統合の論理」の必要性が生じてくるのである。聖イシード

口農業協会が一八八八年、「贊助会員」という新カテゴリーを設けて、土地所有者でない農民にも参加の道を開いたのは、全農民の結束を改めて強調する必要に駆られたからである。そして、この全農民の結束を可能にする「新しい統合の論理」こそがカタラニスモであつた。カタルーニャという民族共同体の再生のため、カタルーニャの全階層の人々を結集させるこの論理は、伝統的な価値規範をその言説の中に巧みに取り込みながら、ナショナリズムという近代的装いをまとつて登場する。⁽²³⁾

四、カタルーニャの地域ナショナリズムと地主

カタルーニャの地主は中央政府の自由主義的・中央集権的政策に警戒の目を向けながらも、自分たちの伝統的支配を維持するために、復古王政下の二大政党（特に保守党）をつかず離れず支持してき⁽²⁴⁾た。しかし、農業危機を契機に彼らは、中央政府により批判的な目を向けるようになる。さらに、自分たちの置かれた孤立状態から抜け出すため、都市ブルジョアジーとの連携も模索しはじめる。カタラニスモは都市のブルジョアジーと彼らを結びつける理論的紐帯としての役割ももつていたのである。

(1) カタラニスモの誕生と地主層

一九世紀、カタルーニヤの山間部ではカルリスタ戦争

）のようなカタルーニヤ社会の構造的変化があつたのである。

「間」における連邦共和主義の政治的実験が失敗したことによる無力感が人々の間に広がっていた。カタルーニヤは分裂状態にあつた。しかし、工業化と都市化の進行、また農業危機後の沿岸部への人口集中は、都市部における人々の接触・交流を盛んにする。また、一九世紀半ばから始まつた鉄道網の敷設や道路網の整備は、沿岸部と内陸部、都市と農村間の人的・物的交流をさらに促す。

こうして、政治的対立によつて二つに分裂していたカタルーニヤは、都市部に有利な形で徐々に再編されていき、ここに社会の新しい「統合の論理」としてカタラニスモ⁽²⁵⁾が登場する下地が整つていつたのである。さらに、工業化が引き起こしたスペインの他地域からの労働移民の流入は、カタルーニヤの人々の「われわれ意識」を強くさせることにもなつた。一九世紀後半『文芸復興 La Renaixença』紙を中心にカタルーニヤ文化復興（カタルーニヤ・ルネサンス）の機運が盛り上がり、またバランティ・アルミライ（Valentí Almirall）らのイニシアティブでカタルーニヤ・センターが設立された背景には、

地主にとつて、彼らの不満を外に向け、内部の凝集力を高めることのできる格好の材料であった。サバディ、サン・サドゥルニ・ダノイア、ビック、レウス、アル・ブルック、ラ・セウ・ドウルジエイなど各地で統一民法制定への反対集会が開かれ、それを通して農村部の人々もカタラニスモの運動に触れていた。この点において、キヤンペーンはナルシス・バルダゲールが言つたように「カタラニスモの最初の勝利」だけでなく、その「上手な種まき」としての意味ももつていて⁽²⁶⁾いる。カタルーニャの法曹界やカタラニスタたちの抵抗を前に、中央政府は民法に「カタルーニャ固有の法は尊重される」という規定を盛り込まざるをえなくなつた。

では、カタルーニャの民族主義的運動が高まる中、カタルーニャの地主はこれにどの程度関係していたのだろうか。八八年、カタラニスタたちはバルセローナを訪れた摂政マリア・クリスティーナにメッセージを手渡す。それはハンガリーに広範な自治権を賦与したオーストリア＝ハンガリー帝国（摂政はオーストリア・ハプスブルク家の出身で、オーストリア皇帝のいとこ）の例を引き合いに出し、スペインもカタルーニャに対し同じような権利を与えるよう求める内容であつた。ここには一千六

百名の署名が添えられていたが、職業が判明している一五七〇名の署名者のうち、地主の割合は三六・七五%（五七七名）にのぼる。これは実業家・銀行家などの産業ブルジョアジー（二二七名）や自由業・インテリ階層（二三〇名）をおさえて最も重要な集団を構成している。⁽²⁷⁾

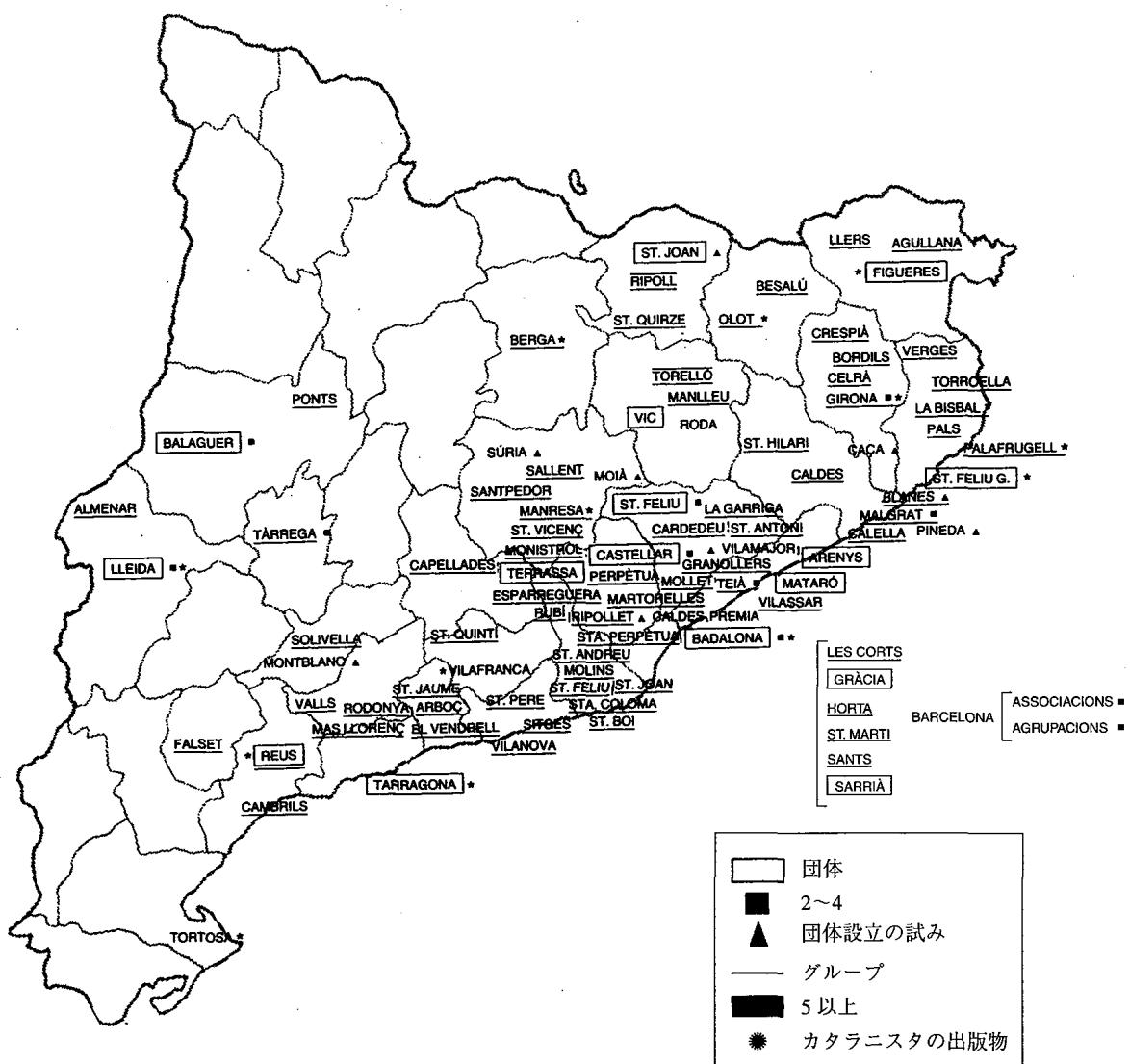
スペイン民法制定に反対する運動の中から、九一年にカタラニスタ諸団体を統合するカタルーニャ主義同盟（Unió Catalanista）が結成された。「祖国カタルーニャ」を表象するスタンプやコインが発行され、旗や歌も創られた。一八九一年にマンレザで開かれた大会では、その後のカタラニスモ運動にとつて象徴的意味合いを持つ「マンレザ綱領」（カタルーニャ地域憲章のための綱領）が作成された。同綱領はカタルーニャ固有の議会の設立を謳つてゐるが、家長にのみ投票権を与え、団体やギルドを選挙母体にするといった保守的で階級調和的性格（corporativismo）を強くもつてゐる。また、カタルーニャと教会、国家との間で協約（コンコルダート）を結ぶなど社会における教会の役割を重視し、その伝統主義をうかがわせている。⁽²⁸⁾J・ジュレンスによれば、マンレザ大会から一九〇一年のタラーサ大会までの参加代表者のうち、地主層は常に三割前後を占め、この運動の

重要な構成要素となつてゐる。他方、地主でない農民（小作農、農業労働者）は全大会を通じてほとんど参加していない。九二年大会を具体的に見ると、参加者二四三名のうち土地所有者が全体の三一%を占め、これは弁護士や医者などの自由業者（約五〇%）には及ばないものの、工場主・銀行家（約一〇%）、商人（五%）よりも重要な位置を占めている。⁽²⁹⁾

このように八〇～九〇年代にかけて地主層はカタラニスモの運動に参加し、その主要な構成要素となつていたことが分かる。では、その中でもどのような地主たちが運動と積極的に関わつたのだろうか。これについては今後の研究の進展をみなければならぬが、カタラニスモという新しい政治的動きにいち早く反応したのは、まずラバッサ・モルタ契約が行なわれてきたバルセローナ県やタラゴーナ県のブドウ栽培地域の地主たちであつたと推論できる。スペイン民法制定によつて自分たちの伝統的利益が損なわれるという外からの脅威と、小作紛争による内側からの脅威を同時に感じ、それゆえ新しい統合の論理（カタラニスモ）の必要性をも感じていた地主たちである。この点についてカタルーニヤ主義同盟を支持した諸団体の分布（地図一）及び大会参加者の出身地分

布（地図二）を見てみよう。例えば地図一は、一八九八年から一九〇二年の間に存在していた支持団体の分布であるが、バルセローナ県を中心とした地中海沿岸域に固まつてゐることが明らかである。また、地図二は出席者中地主の参加割合が最も高かつた九五年のウロット大会において、出席者が代表している地域を百分率で示したものである。それによると最も高い地域がバルセローナで、それにマレズマ、バジエース・オリアンタル、バジヤス郡といったバルセローナ近郊の三郡、さらにブドウ栽培地域を広く含む地中海沿岸域、灌漑による野菜栽培が盛んなレリダ地域が続いている。これとは対照的に、ピレネー山麓から内陸部の伝統的で遅れた農業が続けられている地域では、同盟への参加率も低い。また、聖イシードロ農業協会の活動の中心がバルセローナであり、その近郊地主は都市とのつながりが強く、より進んだ技術・資本などの導入に熱心であつたことを思い出してもらいたい。さらに、歴史家ボルジヤ・ダ・リケーによると、大地主のプレゼンスが高いより豊かな農村地帯ほど、中央からの政治的介入に反発する傾向が強かつた。⁽³⁰⁾これらの点を考慮すると、地中海沿岸域の活動的な地主層がカタラニスモの運動により積極的に対応して行つた、と

考へても間違ひはないと思われる。

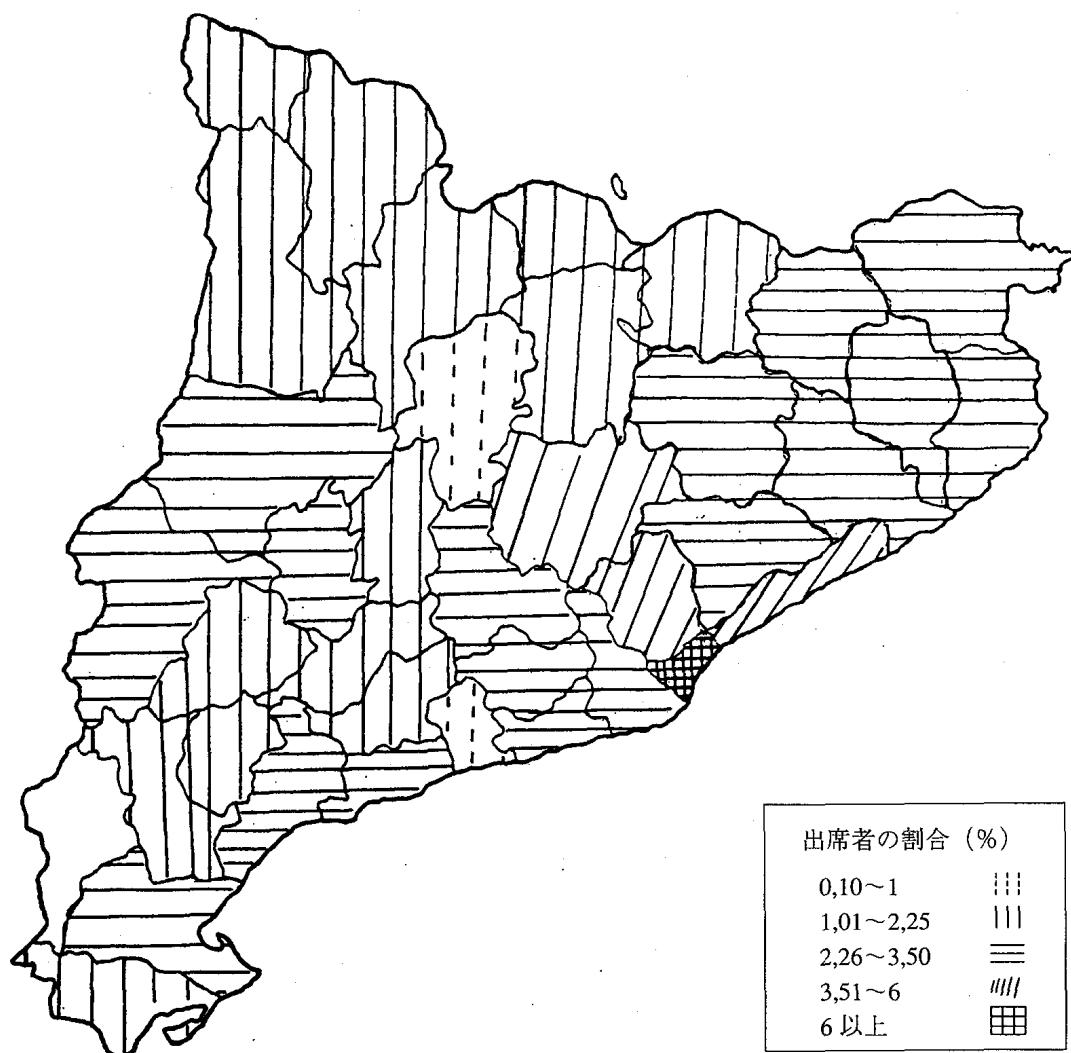


地図一 1898~1902年の間につくられたカタラニタの団体、グループ、出版物

出典：J. Llorens i Vila, *La Unió Catalanista i els orígens del Catalanisme Polític*, Barcelona, 1992, p. 123.

(二) ビガタニズマ

カタラニスモと地方の農村を結びつける「蝶番」としての役割を果たしたのが、ビガタニズマ (Vigatianisme) と呼ばれる保守的な思想傾向である。バルセローナ県の地方都市ビックで形成されたカトリック・グループに代表されるので、町の名を取りこう呼ばれた。彼らは週刊誌『モンサラットの声 La Veu de Montserrat』を発刊し、そこで「祭壇と家庭。神とカタルニーヤ。これがわれわれの古い綱領、かつ新しい綱領である」と謳つた。⁽³¹⁾ ムンサラットとはバルセローナ郊外にそびえる山塊で、中腹にはカタルニーヤの守護聖人「黒聖母」を奉った寺院がある。保守的な人々にとつては宗教的伝



地図二 ウロット大会への参加代表者

出典：J. Llorens i Vila, *La Unió Catalanista i els orígens del Catalanisme Polític*, Barcelona, 1992, p. 126.

統を体現するカタルーニャのシンボルとなっている。ビガタニズマは、バランティ・アルミライなどに代表される都市の進歩主義、反教権主義、共和主義の傾向に批判的であり、カルリスモから引き継いだ保守的な潮流を作っている。そして、その伝統主義や反中央集権、社会を有機的な集合体とみる立場（*organicismo*）、協調組合主義といった思想的特徴は、後にリイーガの主張の中にも取り入れられることになる。⁽³²⁾

このカトリック・グループを代表する人物が、ビックの司教であったトレス・イ・バジャス（Torres i Bages）である。彼は一八九二年に出版した『カタルーニャの伝統』の中で、「カタルーニャと教会は不可分のもの」であり、「祖国を構成する緊密に結びついた二つの要素である」と述べ、ナショナルな共同体に

おける宗教と教会の役割を強調している。⁽³³⁾ 彼はルネツサ
ンスからフランス革命、そして社会主義に至る革命のプロセスに批判的で、ジャコバン的な中央集権国家の人為性に対し自治体 (municipio) や地方 (región) といった共同体の自然的機能を対置させる。⁽³⁴⁾ 「教会の司祭は地主や小作農あるいは農業労働者の息子であり、それゆえ尊重されねばならない」、「われわれは雇い主に対する恭順や配慮を労働者に求める。なぜならば人間間のヒエラルキーや階層化は、われわれの自然な必要からきているからである」、「雇い主と労働者は一つの家族を形成する」といった伝統主義的、家父長的立場は、都市部における自由主義的風潮に対しても信の目を向ける農村部の人々に受け入れられた。カタラニスモの保守潮流を研究するI・モラスは「少なくともカタルーニャに関して、伝統主義は民衆の運動として現れ、その隊列の外にはあまり強い影響力を持つていなかつたが、常に宗教の擁護という立場でつながつていた。そのプレゼンスは特に農村地域で重要で、そこでは世俗主義への反対、強力な労働運動の欠如という政治的特徴がみられる」と述べている。⁽³⁶⁾

ビガタニズマはビックを越えてカタルーニャの広い範

団で支持をえた。地方の富裕な地主層はバルセローナに居を構えることが多く、また子供たちは勉学のためバルセローナに出ていた。都市に居住する彼らの間でこうした農村に基盤を置く保守的・伝統主義的な思潮傾向は、歓迎されても拒否されることはない。⁽³⁷⁾ それを示す例が、週刊誌として一八九一年にバルセローナで創刊された『カタルーニャの声 La Veu de Catalunya』である。創刊の目的を「カタルーニャの民族的意識の覺醒」と掲げるこの雑誌にはナルシス・バルダゲー(ビック出身)、ジュアキン・カボット(バルセローナの実業家)、そしてビックの聖堂参事会員ジヤウマ・クリエイなどが関わっていた。クリエイはトラス・イ・バジャスの友人で、先に述べた『ムンサラットの声』を主催する人物でもある。⁽³⁸⁾ この週刊誌は一八九九年に同名の日刊紙として再出発し、やがて設立される保守政党「リィーガ・ラジウナリスト」の機関紙となるのである。

(三) 都市と農村ブルジョアジーの合流

九八年の米西戦争における敗北で、スペインは最後の海外植民地キューバやペルトリコ、フィリピンを失つ

た。カタルーニャの纖維産業経営者、ワイン業者、ブドウ栽培農家にとつても纖維製品やワインの輸出市場を失う深刻な事態であった。それまで都市ブルジョア層は、力を増す労働運動を警戒して、警察や軍の治安維持能力に依存してきた。が、植民地市場の喪失は中央政府の行政能力に対する幻滅・失望を引き起こし、彼らの中央政府寄りの立場を変化させる。中央政府への抗議は、翌年の税金のボイコット (*tancament de caixes*) へとエスカラートした。九八年の敗戦を契機に、バルセローナの産業ブルジョアジーは中央政権から離れ、カタラニスモの運動へ接近する。それが、一九〇一年の総選挙を前にした、ブルジョアジーとプラ・ダ・ラ・リバなどのカタラニスタたちとの合同である。後者のグループはより政治主義的・保守的な路線を掲げて、カタルーニャ主義同盟から離反していた。この合同からカタルーニャ地域連盟 (Lliga Regionalista de Catalunya 以後リィーガと呼ぶ) が生まれる。同党はその年の選挙において、初めてバルセローナで中央の二大政党による支配に風穴を開けた。⁽³⁹⁾

では、この保守的カタラニスモを代表する政党「リィーガ」と地主層との関係はどのようなものであったのだろうか。既に見たように、一八八〇～九〇年代にカタ

ルーニャ民法の擁護キャンペーンを通して、地主層とカタラニスモは結びついていた。この関係はリィーガ成立後も基本的に引き継がれる。ボルジャ・ダ・リケーが言うように、リィーガはカタルーニャの全保守勢力が合流したもので、都市ブルジョア層だけでなく農村部の大・中地主の党でもあつた。カタルーニャ主義同盟に支持を表明していた地主たちは、リィーガが設立されると、より保守的なこの党へ鞍替えした。それを示すのがリィーガ設立後に開かれた同盟のバルセローナ大会（一九〇四年）への地主の参加率の低さである。それまでの諸大会では常に三割を維持していた地主のプレゼンスは、この大会で一八・一四%と大幅に落ち込んだ。彼らのかなりの部分が、より保守的なリィーガに流れて行つたせいであろう。⁽⁴⁰⁾

リィーガは一九〇一年、初めての選挙で勝利したものの、その後しばらくは思うような選挙結果を上げられなかつた。一九〇四年には、より共和主義的で民族主義的な人々が党を割つて出たため、その保守的な傾向は一層強まる。一九〇五年バルセローナで「ク・クット事件」⁽⁴¹⁾が発生し、その後の中央政府の威圧的措置は多くの人々を巻き込み、一気にナショナルな抗議行動に発展した。

一連の行動のイニシアティヴを握っていたのはリィーガであった。その主導の下で選挙同盟「カタルーニャの連帶」が結成され、続く一九〇七年の総選挙で「連帶」に結集したカタラニスタたちは、カタルーニャに割り当てられた四四議席のうち四一議席を獲得したのである。これはリィーガの影響下にある「連帶」がバルセローナ以外でも広まつたことを示している。こうして一〇世紀初頭の数十年間、カタルーニャの民族主義的運動は保守リーガによつて率いられていった。

他方、地主の利益を代表する聖イシードロ農業協会は「革命の六年間」で垣間見た社会革命への恐怖から、復古王政への協力には応じていたものの、既に見たように中央政府の自由主義的、中央集権的政策が自分たちのヘゲモニーを搖るがことに常に警戒感を抱いていた。リィーガはこうした地主層の中央に対する不信感に訴え、自分たちとの共闘を求めたのである。つまり、カシキスモに依存する現状維持 (inmovilismo) よりも、リィーガの唱える政治的刷新主義、改革と実利をめざした自治主義の方が地主支配をより良く保障する、と強調した。これが農業危機の中で孤立感を強め、左派思想の浸透を警戒する地主たちの心を捉えることになる。一九二〇年

代に党首としてリィーガを率いるF・カンボー (Francesc Cambó) は、一九〇一年バジエース農業組合の設立大会で次のように述べている。「土地所有者たちはアソシアシオン（組合）をもつことで、自分たちの要求を政府に知らしめ、農民をカシキスモのくびきから解放することになるう」。⁽⁴⁵⁾ こうして、リィーガを通してカタルーニャの都市と農村のブルジョア層は結びつく。

では、地主層とリィーガの結びつきを具体的に見てみよう。農業協会の会長や理事会メンバーなど組織の主要ポストに代々ついている家系（フルトゥニ家、カンプス家）は、同時にリィーガの活動家や支持者でもあつた。親子で協会の会長をつとめたカンプス侯爵家の息子の方（カルラス・ダ・カンプス Carles de Camps）は、九八年に摂政マリア・クリスティーナに手渡された「メツセージ」や一八九九年秋のシルベーラ政府への批判声明に署名し、一九〇五年には「ク・クット事件」に抗議し国会で演説を行なつてゐる。また「カタルーニャの連帶」にも積極的に関与し、一九一六年リィーガが発表した「カタルーニャと偉大なスペインのために」という文書作成にも携わつた。また、協会の創設者の一人、アピファニ・ダ・フルトゥニ (Epifani de Fortuny) の息子

カルラスは、やはり協会の会長を勤めるとともに、リーガの指導者の一人であった。その孫も協会の会長職に内戦後に就いている。⁽⁴⁷⁾ この二家族以外にも、協会理事会のメンバーであったファリップ・バルトゥラン (Felip Bertran) の息子ジュゼップはリーガの創設者の一人であり、F・カンボーの最も親しい協力者の一人であつた。⁽⁴⁸⁾ このように協会とリーガの上層部の人員は互いに重なり合い、そこに緊密なネットワークが作られていることがうかがえる。協会は農村におけるリーガの「砦」となつていた。⁽⁴⁹⁾

しかしながら、リーガと地主の結びつきは地域によつてかなりの差異があつたと考えられる。都市の市場から遠く離れ、遅れた農業が依然として支配的なピレネー山麓や内陸部は、政治的にカルリスマの伝統が残つてゐたり、あるいは中央への依存度が高いカシキスモが根強かつたりする傾向があり、こうした地域にリーガの影響力が浸透するのはなかなか困難であつた。他方、農業協会の活動範囲である地中海沿岸部においてもリーガと地主の関係は一律的ではない。地主が中央の既成政党を支持し現状維持を求めるのか、あるいは新たに台頭したリーガを応援して政治的变化を希望するのか、それ

はその地域の土地所有構造、農業の在り方、地主の性格（都市部とのつながり具合や中央の二大政党との関係など）複数の要因に左右されるからである。例えば同じジローナ県でも、ビラデムエルス、トゥルエリヤとプッチヤルダ、サンタ・クロマの地主の投票行動には違いが見られることが分かつていて、前者二つの自治体では、リーガよりもマドリード中央政界との政治的つながりに依存することが分かつていて、前者二つの自治体では、リーガよりもマドリード中央政界との政治的つながりに依存する傾向が強いとされる。バルセルスなどはその違いを、後者の自治体ではバルセローナのブルジョア層が土地を所有している度合いが高いのに対し、前者では地主が都市部と疎遠な純粹にローカルな性格を強くもつてゐることに帰している。⁽⁵¹⁾ また地主層がリーガを支持したとしても、はたして彼らがどの程度党の地域主義的イデオロギーに共鳴し、その政治的変革の主張を真剣に考えていたかは検討の余地がある。中には、自分たちの政治的・社会的影響力を保持するための単なる政治的手段・口実としてカタラニスモを利用する地主たちもいたであろう。彼らはリーガがその打破を叫んでいた「カシケ」その者でもあつた。⁽⁵²⁾ このようにカタラニスモと地主の結びつきに関しては、今後一層の研究が必要である。

五、カタラニスモによる農民の動員・組織化

(一) 動員の論理

では、カタラニスモ保守を代表する政党「リィーガ」、それを支持する農業協会は、どのようなメッセージを農民に送ろうとしたのだろうか。そして、その言説の特徴はどのような点にあるのだろうか。

まず第一の特徴は、カタルーニヤの内に向かつて「全農民の統一」を説く階級調和的論調である。「皆いつしょに働く」⁽⁵³⁾ 「Treballen tots junts」⁽⁵⁴⁾ は最もよく使われたスローガンの一つである。農民の「共通の利益」を強調し、アソシアシオンの設立を説く。このアソシアシオンとは地主、農民双方が参加する混成組合である。また、内なる結束を説くその一方で、外からの脅威を強調する。外部の敵とは他ならぬスペインの中央政府であり、その自由主義的政策がカタルーニヤの伝統的農村社会を支える価値観・法を脅かしているとする。カタルーニヤの人々は「中央集権主義の犠牲者」なのである。政府の農業政策を「未熟」「不充分」「取るに足りない」「無益」と批判し、ワイン価格低迷の責任も国にあるとする。そしてカタルーニヤの「外敵」に効果的に対処するためにも、

内部の結束の必要が一層強調されることになる。逆に言えば、農村内部の対立を回避するために、中央政府の外圧が殊更利用されたとも言えよう。⁽⁵⁵⁾

第二の特徴は、「神」「祖国」「家族」といった伝統的な価値観の称揚である。これは前半部分で述べた「パライスマス」と深く結びついている。これら伝統的な価値への愛着は「大地への愛」と結び付けられる。バジエース郡の農業組合誌は「神と祖国のために働いているのを忘れてはならない。なぜなら、大地への愛はとりわけ人の徳を高めるものであり、また祖国への愛を培うからである」⁽⁵⁶⁾ と説いている。つまり大地を耕すことによつて、人はカタルーニヤというナシオン (nación) への愛着を一層強め、またナシオンが伝統的に維持してきた価値観をより尊重することになる。そして「われわれの祖国が経済的にアイルランドの二の舞を演じたくなければ、といふのも政治的には非常に似ているからだが、我々の法の完全な保持と小土地所有の保護が絶対に必要である」と。

第三に、都市と農村を意識的に対置させ、前者を「腐敗と悪癖の巣窟」⁽⁵⁷⁾ であると弾劾し、後者を「徳のある生活と調和的世界」と理想化・美化する。これも本稿の前

半で論じたカタルーニャ農村の牧歌的イメージの多用とつながるものである。カタルーニャの「外敵」がスペイン中央政府であるとすれば、都市で増殖する諸悪はカタルーニャの「内なる敵」であり、これらが都市から農村に侵入するのを食い止めなければならない。こうした考え方には、社会全体の工業化や都市への人口流出が進むなかで、都市に対する農村の地盤低下に対する危機感を反映しているとみられる。この場合、都市の悪影響とは単に金銭的な欲望だけでなく、労働者間で流布していた社会主義やアナーキズムなどの左翼的な「危険思想」も含んでいる。『カタルーニャの声』は、「(農民は)労働者のようなストライキや抵抗組織によらずに、調和を持つて生きることができる。農民は労資闘争の代わりに、良き信仰といふもつと高貴な武器を使つた」と階級闘争のない社会を称揚した。これら都市の悪影響から農民を守るものがカタルーニャの伝統である。一九〇九年にはバルセローナでモロッコ派兵反対から「悲劇の一週間」と呼ばれる市民や労働者の暴動が起こり、その際、市内の多くの修道院やカトリック関係の施設が襲撃、焼き打ちにあつた。バジエース郡農業組合の会長は暴動後、スペイン首相に当てた書簡の中で、街頭暴動を「野蛮かつ

破壊的で神を冒涜し、またカタルーニャ精神に反する行為⁽⁶⁰⁾と非難し、暴動に対するマウラ政府の厳しい弾圧政策を支持している。

これら三つの特徴を見ると、聖イシードロ農業協会が一九世紀中頃から一貫して唱えてきた論調をリイーガも基本的に継承していることが分かる。ただ、この時代と前の時代の違いを上げるとすれば、擁護すべき小作制度の中核を占めるのがもはやが「ラバッサ・モルタ」ではなく、それは地主に完全な土地所有権を認めるより近代的な小作契約「アパルセリア」にいつのまにか取つて代わられたという点である。協会の雑誌によると「(カタルーニャ)民衆の社会・法的生活の中で最も特徴的で重要なものの、そして今最も必要とされるのは『アパルセリア』である」。

(二) 農業組合運動

カンボーが「農民をカシキスモのくびきから解放する」と称揚した農業組合が、カタラニスモなどのように結びついているかを最後に見てみよう。

農業危機は地主と小作農の両方の側に意識変化をもたらした。農業史に詳しいR・ガラボウは、伝統的農法では

立ち行かなくなつたこと、農産物の販売や生産手段の確保において市場により緊密に結びつけられるようになつた」と、耕作方法や技術の刷新、こうした点が農民のメソナルな部分で重要な変化 (*rupturas mentales*) を引き起こし、今までの伝統的・慣習的手法からの離脱につながつたのではないかと見てゐる。農業に対する意識変化、これは小作農だけでなく、地主の側についても言える。ブドウ株植え替えから化学肥料・薬剤の負担、税金の支払い、さらには農業の資本主義化が要請する市場におけるワイン価格の維持や品質向上への努力などは、土地を貸し出すだけの極力少ない負担で利益を得ようとし始めた伝統的な地主の在り方を大きく変化させることになつた。それまでラバッサイラスに任せきりだつたブドウ栽培についても、収益の増大という点からより積極的に介入することが必要になつた。技術の改善により収益を拡大することができれば、それは小作農の不満を沈静化し、彼らが政治的に過激になるのを回避することにもつながる。こうして生産性を上げるために地主と小作農との協同が奨励され、各地で農業組合が設立された。

農業組合の主たる目的は、農産物の共同販売や種子・肥料・農機具など生産手段の共同購入である。新しいブ

ドウから収穫が可能になると、今度は共同でワインの醸造や出荷、販売が試みられた。共同価格の設定や市場への直接販売によつて、中間業者である商人に対抗しようとしたのである。そして最後に、共同金庫融資、相互扶助などの制度も導入が検討された。このように、世紀末の農業危機を通して、農民は今までの個人主義を脱し、少しづつではあるが協力することを学んで行つた。⁽⁶³⁾

農民向け雑誌から「団結」を呼びかけるメッセージが発せられ、各地に組合が設立された。カムリヨンク (I. Campionch) によれば、農業組合と認められる団体は一九一〇年にカタルーニャ全体で三三七組合、一九一七年の勧業省の調べでは三三六組合あつた。その数は一九一〇年代になると飛躍的に増大し、一二二年にはおよそ六五〇〇七〇〇組合に達する。⁽⁶⁴⁾ カタルーニャはスペインで旧カステイーリヤ地方とならび、農業組合運動が最も盛んな地域となつた。⁽⁶⁵⁾

農業組合は、聖イシードロ農業協会の下で組織されていった。一八八九年、協会のイニシアティブの下、カタルーニャ農業同盟 (Unió Agrícola de Catalunya) が設立され、九〇年に開かれた総会で、組織はできるだけ多数の農民や農民団体を結集し、選舉に独自候補を擁立する

ことを目標にかかげた。⁽⁶⁶⁾ 農業同盟は最終的にはカタルーニャとバレアレス諸島の農業組合を統合し、カタルーニャ・バレアレス農業連盟(Federació Agrícola de Catalano-Balear) という「スペインで最も強力かつ最もよく組織された農業団体」⁽⁶⁷⁾ に編成される。

農業組合運動の指導者たちは、保守的カタラニスモと農民をつなぐ媒体である。組合は政治的に中立であるという立場をとつていたにもかかわらず、その指導者たちは県レベルでの選挙にリイーガから立候補してい⁽⁶⁸⁾た。農民たちは農業組合を通してリイーガの議員へ陳情を行なう一方、リイーガのイデオロギーや主張が、組合を通して農村部に伝播された。このように双方は補完的関係にあつた。両者をつなぐ典型的人物として、例えばバジエース郡の地主マスpons・イ・カマラザ (J. Maspons i Camarasa) を上げる事ができる。彼は、バジエースの農業組合を創設した一人であり、聖イシードロ農業協会やカタルーニャ・バレアレス農業連盟の書記を勤めるとともに、『マンレザ綱領』を推進し、『カタルーニャの声』の編集者で、カタルーニャ主義同盟の要職に就くなど、活動的なカタラニスタでもあつた。⁽⁶⁹⁾ 彼のような人物を通して、カタラニスモと農民は接点をもつたのである。

しかし、リイーガや農業協会に組織された農業組合には限界があつた。組合は「生産の擁護」と「組合員間の連帶」という実利面での利点を強調して中小農民を惹きつけようとしたが、実際に組合を運営するのは時間的余裕がある者、つまり他の人間を雇用することで自分の時間が持てる富裕な地主層の手に握られていた。組合内の投票権は、各自の出資金や組合へ提供した農産物の量に従つて比例配分されることが多く、投票は平等とは言えなかつた。⁽⁷⁰⁾ 長期間組合の執行部が一握りの人間によつて運営される状態が続けば、表向きには「非政治的」立場を取つても、当然政治的な偏りが出てくる。農業組合がリイーガの「地方支部」としての役割をになつていたことは既に述べたとおりである。

一方、組合への出資金ですら支払えない貧しい農民は、組合活動から疎外され、取り残されていた。一九〇四年、バジエース農業組合の機関紙には、小農の次のような不満が述べられている。「組合の恩恵を農民の最貧層にもたらすことは不可能である。今日のわれわれを見ればわかる。マズベー、農業労働者、小土地所有者たちが、組合の恩恵をすぐに享受することは難しいのだ。ある者はその無知から、他の者は組合から遠く離れて住んでいる

為、また多くの者がその経済的貧しさゆえに組合のメンバーになることができない。また、加入したとしても、融資を受けることは難しく、買い物も現金で支払えず、余暇で組合に出版物を読みに出かけることすらできない⁽⁷⁾。こうした下からの不満を抑え、彼らを垂直的に組織しようとする時に使われるのが、「全農民の統一」を説くカタラニスモの論理である。小農民の切実なねがいは全農民の利益というナショナルな概念の下に無視される。また「小作地の買戻し」という小作農にとって重要な問題も農業組合では一切触れられなかつた。

伝統的な価値観と深く結びついた階級調和的・家父長的な言説、農業組合の下での相変わらずの地主支配、土地所有制度の改革など基本的問題の看過、こうした状況の下で中小農民が抵抗の声を上げたとしても何ら不思議ではない。世紀末の農業危機がかろうじて克服されると、カタルーニャの農村は再び静けさを取り戻したかにみえた。しかし、ワインの恒常的な生産過剰、生産コストの上昇は続き、一九世紀の「黄金期」は完全に過去のものとなってしまった。窮状にあえぐ小作農民たちは、地主中心の農業組合から離れ、そして再びブドウ株の植替え

問題が浮上する一九一〇年代になると、今度は「ラバッサイラス同盟」という独自の組合連合設立へ向かうのである。一九一〇～三〇年代にかけてラバッサイラス紛争は以前より一層激しく争われ、政治問題化する。そしてその時中小農民の動員に成功するのは、より共和主義的・急進的なカタラニスモを標榜する新しい勢力であった。

註

(1) 本稿の目的は地主と保守的カタラニスモとの結びつきを考察することにある。中小農民の政治化、彼らとカタラニスモとの関係という問題については改めて別の機会に論じたい。

(2) A. Balcells, *El problema agrario en Cataluña*, Madrid, 1980, p. 59.

(3) 税金を地主が支払っているという事実は、裁判になつたとき、小作農との契約が「ラバッサ・モルタ」ではないという地主の言い分を裏付けるものとなつた。なぜなら、永代借地契約としてのラバッサ・モルタでは、通常借地農が土地税の支払いを行なうよう求められていたからである。

(4) 「アバルセリア」は分益小作制の一つで、地主の収穫取り分けはその経費負担分に比例している。絶対的な土地所有権を貸主に認める点で、下級所有権（用益権）を小作農に認めるラバッサ・モルタ契約と基本的に異なる。

- (11) V. Vives, M. Llorens, *Industrials i Polítics (segle XIX-XX)*, Primera reimpressió, Barcelona, 1983, p. 35.
- (12) L. Casassas, "La urbanització del mon rural a Catalunya," *L'Aaveng*, núm. 134, Barcelona, 1990, p. 10.
- (13) J. Lorman, I. Planas, *Geografia de Catalunya*, (Barcelona, 1987), p. 146.
- (14) *op. cit.*, 149.
- (15) J. Planas i Maresma, *Estudis de Granollers i del Vallès Oriental*, 4. *Propietaris organitzats. Estudi de la Cambra Agrícola del Vallès (1901-1935)*, Granollers, 1991, pp. 168-169.
- (16) Balcells, *op. cit.*, pp. 62-64.
- (17) ハヤロスはガリシア特有の永代借地制であり、この地域の貧困化と後進性の原因であるとして批判された。
- (18) Balcells, *op. cit.*, p. 65.
- (19) *Ibid.*
- (20) Andreu Mayayo, "Geografia del sindicalisme agrari," *L'Aaveng*, núm. 134, p. 18. 「革命の六年間」に実施された男子普通選挙制におけるカタルーニャの有権者数はおよそ四十八万八千人であったが、七八年の選挙法によりその約八割が選挙権を失い、七万八千人ほどに縮小されていた。これはカタルーニャの成人男子の5%にもみたな数であった。成人女性はもちろんのこと、年納税額が二五ペセタに満たない男子も投票権を持てなかつた。また、選挙区と人口分布の不均衡、小選挙区における多数代表制など中央の一大政党に有利にはたいていた。
- (1) Balcells, *op. cit.*, p. 67.
- (2) E. Giralt, "El conflicto 'Rabassaire' y la cuestión agraria a Cataluña," *Revista del Trabajo*, núm. 7, Madrid, 1965.
- (3) Balcells, *op. cit.*, p. 52. 契約期間の限定期は、一八八九年のスペイン民法の規定による。詳しく述べ本稿前半部分を参照。民法で期間が50年と限定されたことは地主側の一応の勝利である。だが、彼らも完全に満足はしていなかつた。なぜなら民法はラバッサ・モルタが「永代借地契約ではない」と明確に否定していなかったからである。つまり、将来ラバッサイラスがの点を突いて、小作地の「賦課→redempció」を要求していく可能性を残したからである。Jordi Pomés, *La Unió de Rabassaires*, Barcelona, 2000, p. 43.
- (4) 「トゥハダ・ハハム」は地主に一定額の小作料を賃幣で支払つたのである。アバルセリアと回しく土地の所有権は貸主の側にある。
- (5) J.・カルモーナル・ヘンソンはラバッサ・モルタ契約の減少と地主・小作農対立の激化の原因が、契約内容をめぐる法的問題よりもむしろ、ワイン価格の低迷、フィロキセラ禍、そして新技術と資本の必要とこつた外在的因素に帰す。Juan Carmona, Jaimes Simpson, "El contracte de Rabassa Morta i els canvis en la viticultura 1890-1929," *Recerques*, núm. 38, Barcelona, 1999, pp. 104-124.

Manel Riques(dir.), *Història de la Catalunya Contemporània*, Barcelona, 1999, p. 156.

(21) **地元選舉区**とは縁の無い者が中央政党の指示で立候補し、カシケの集票力と選挙操作によりて当選するといふ、いわゆるカシキスモが根強くあつた。

(22) Balcells, *op. cit.* pp. 63-64.

(23) タラゴーナ県のカタリニスタ団体の雑誌『ラ・グラウ・ダル・カンプ（農村の声）』は、「我々のところにやつて来る正しき素性の人々は全て暖かく迎え入れられるだらう。政治的立場や富、社会的条件に關係なく、貧しい人も金持ちも、力のある裕福な人も、慎ましく質素な労働者も、賢く博学な人も、教育を受けたこと熱望する無学な人も、全ての人は差別なくカタリニスタの一員となる」と述べてゐる。³⁰ Pere Anguera, "Nacionalisme i qüestió social a la premsa finisecular del camp de Tarragona," *Estudis de Història Social*, núm. 28-29, 1984, pp. 328-329. **地主**は自分たちの権利を要求の第一に「現代の要請と進歩に調和した（カタルーニャ）地方の古き自由と法の復権」を掲げてゐる。Ibid., p. 328.

(24) Borja de Riquer "Els corrents conservadors catalans i la seva evolució cap al catalanisme polític," *L'Avenç*, núm. 100, 1987, pp. 78-81. つゝーー³¹ カタルーニャの農村ブルジョア層に於ける王統派勢力は常に「よせ者」でしかなく、保守・自由党どちらを支持するかしてゐる者は実利的判断によるもの以上ではなかつた。例へば、

聖イシードロ農業協会の会長を親子で務めたカンプス侯爵家の場合も、最終的にリイーガ支持に行きつてしまい、選挙³²に連なる政治勢力と手を結んでいた。まだ近代的な政党組織といつものではなく、支持者と党との関係も流动的であつた復古王政期、これは珍しいことではなかつた。

(25) Balcells, *El nacionalismo catalán*, Madrid, 1991, p. 31.

(26) J. Llorens i Vila, *La Unió Catalanista i els orígens del catalanisme polític*, Barcelona, 1992, p. 107.

(27) Ibid., pp. 509-512.

(28) Balcells, *op. cit.*, pp. 36-38. Jesús Mestre i Campi (dir.), *Diccionari d'Història de Catalunya*, Barcelona, 1998, p. 109. **地主** 「カタルーニャ・ナショナリズムの歴史」立石・田塚編『スペインにおける国家と地域』(国際書院、1990年)、11回—115頁。

(29) Llorens, *op. cit.*, pp. 514-516. たゞ一の分類と割合の数値はあくまでも田舎である。なぜなら、地主でありながら工場主である者もござれば、弁護士でありながら土地を所有する者など、一人が複数の職業を兼ねる場合も多く、その場合のグループに属するかの確固たる基準はなじかぬかも。

(30) Borja de Riquer, *op. cit.*, pp. 82-83.

(31) X. Tornafroch, *El Catalanisme Republicà a la Ciutat de Vic (1930-1936)*, Barcelona, 1998, p. 12.

(32) S. Bengoechea, *Organització patronal i conflictivitat social a Catalunya*, Barcelona, 1994, p. 290.

- (33) Vives, Llorens, *op. cit.*, p. 463.
- (34) *Diccionari d'Història de Catalunya*, p. 1052-1053.
- (35) M. Antonia Ferrer i Bosch, "La pagesia i el moviment nacionalista durant la Restauració a Catalunya", *Estudios de Historia Social*, núm. 28-29, 1984., p. 296.
- (36) Isidre Molas, *Lliga Catalana*, vol. II, Barcelona, 1973, p. 243. 伝統主義的風潮が特に強く残っているのは、レリダ県のアルト・カルダス郡からスルスネース郡やバルセローナ県のバージョス郡を通り、タラゴーナ県アルト・カナリア・コハカ・ダ・ハバラ郡に至る地域である。
Ibid., p. 241.

- (37) Bengoechea, *op. cit.*, pp. 289-290. カタルーニャの建築家アンヘル・ガウディー（タルゴーナ県出身）との親交があつた。
- (38) *Diccionari d'Història de Catalunya*, pp. 263-264.
- (39) カタルニア・スタの一大政党に対する態度は、保守党と自由党では異なる。自由党に対しても、その自由貿易主義や法の統一といった政策ゆえに、カタルニア・スタは一致して反対する。一方、保守党に対してはその態度はまちまちである。例えば、保守的カタルニア・スタは、保守党が地方の伝統を尊重する姿勢を見せてくるため、一定の距離を離れていた。協力によるかわりに、Llorens, *op. cit.*, pp. 250-251.
- (40) Borja de Riquer, *op. cit.*, pp. 78-84.
- (41) Llorens, *op. cit.*, p. 91.
- (42) 一九〇五年、保守系ユーモア誌『ク・クット』に掲

載されたスペイン軍を批判する風刺漫画にバルセローナ刷所の一部が怒り、その印刷所を襲撃した事件。同印刷所ではリイーガの機関紙『カタルーニャの声』も発行された。事件後政府は「裁判権管轄法（レイ・デ・フリスティクシオネス）」を制定したが、これは祖国の統一、軍隊の名誉、公的シンボル（国王、国旗など）を攻撃したり批判したりした者は、軍事裁判所によて懲らされるところのであった。立石、前掲書、110—111頁。

- (43) リイーガに結集した人々は、それまで一大政党と協力関係を保つてい、カタルーニャの政治・経済を支配し、カタルニア・スタの壁面の題字だといあたる。Borja de Riquer, "Burgesos, polítics i castics a la Catalunya de la Restauració," *L'Avenç*, núm. 85, 1985, p. 32. 例へば、イグナシ・ジローナは聖イシードロ農業協会の会長（一九〇一～〇七年）を勤め、「カタルニア・ヤの連帶」から国会議員に選出されたリイーガのメハベードであるが、彼の叔父は著名な銀行家マヌエル・ジローナであつた。 *Diccionari d'Història de Catalunya*, p. 504.
- (44) A. Balcells, J. B. Culla, C. Mir, *Les eleccions generals a Catalunya, 1901-1923*, Barcelona, 1982, p. 248.
- (45) 一・ペラス前掲書のホルヘ・ダ・リケーニョ序文。 *Estudis de Granollers*, p. 10.
- (46) *Diccionari d'Història de Catalunya*, pp. 176-177.
- (47) *Ibid.*, p. 477.
- (48) *Ibid.*, p. 124.

- (49) Montserrat Caminal i Badia, "La fundació de l'Institut Agrícola Català de Sant Isidre : els seus homes i les seves activitats (1851-1901)," *Recerques*, núm. 22, 1989, p. 123.
- (50) カタルーニャの農業者と政治家による「農業の復興」(1890-1936) : *Caciquisme Polític i Lluvia Electoral*, Barcelona, 1985.
- (51) Balcells, Culla, Mir, *op. cit.*, p. 428.
- (52) Jordi Pomés Vives, "Origens del catalanisme en un entorn rural : L'emple de Sant Pol de Mar (El Maresme) (1888-1913)" *Catalunya i la Restauració*, Manresa, 1992, p. 323.
- (53) Ferrer, *op. cit.*, p. 293.
- (54) *Ibid.*, p. 294.
- (55) Casanova i Prat, "la política de la Mancomunitat de Catalunya (1914-1923)," *Catalunya i la Restauració*, p. 174.
- (56) Planas, *op. cit.*, pp. 172-173.
- (57) 祖國への愛をもつた人々、「Visca la Pàtria」, "La Bandera és nostra" などの愛国論文が頻繁に書かれていた。Ferrer, *op. cit.*, p. 294.
- (58) *Ibid.*, pp. 294-295.
- (59) *Ibid.*
- (60) Planas, *op. cit.*, pp. 166-167.
- (61) Ferrer, *op. cit.*, pp. 295-296.
- (62) Jordi Planas, "Catalanisme i Agrarisme : a proposit de

Jaume Maspons i Camarasa (1872-1934)," *Catalunya i la Restauració*, p. 314. Ramon Garrabou, "El camp català als segles xix i xx," M. Tarradell, J. M. Salrach et al., *Estructura social i econòmica del camp català*, Barcelona, 1984, pp. 121-123.

- (63) 「カタルーニャの農業組合」、「カタルーニャの農業組合と個人主義」の集会では、「今おで不運な深刻な危機」があつた。なぜなら船たちが個人主義が支配的であるから、彼らは自分の力を利用して知らないことをやるだけだ。Ferrer, p. 296.
- (64) Josep Castaño, *Directori de Cooperatives Agràries de Catalunya*, Barcelona, 1981, p. 14. カタルーニャの農業組合は、一九一四年に設立されたカタルーニャの県連合体(マヌクバリタード)がその設立を後援した結果である。しかし、實際には必ずしも機関として機能しなかった。
- (65) Antoni Gavalda i Torrents, *L'Associacionisme Agrari a Catalunya*, vol. 1, Valls, 1989, p. 67.
- (66) 農業回復は一年後の一八九一年、カタルーニャ農業組合の本拠地が設立された。
- (67) Planas, *Catalanisme i Agrarisme*, p. 314.
- (68) Ferrer, *op. cit.*, p. 294.
- (69) マヌクバリタード・カタルーニャの二つのアソシエーションの前掲載論文を参照のこと。
- (70) 例へば、バニヤローナ監修による編集です。

執行部改選における投票権を持つのは、組合金庫と十
ヶヤタム山田領の大地主である。Balcells, *el problema
agrario*, p. 147.

(7) J. Plana, "Asociacionisme Agrari Català al Primer
Terc del Segle XX. Un Exemple Comarcal: La Cambre
Agrícola del Vallès (1901-1935)" [ensayo inédito], p. 16.